

Title	2012年以降の「里山」研究の動向について
Author(s)	張, 曼青
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2024, 50, p. 273-287
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94736
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2012年以降の「里山」研究の動向について

張 曼青

目 次

1. はじめに
2. 「里山」概念の変化と既存のレビュー論文
3. 里山ブームへの批判：＜里山＞像なのかそれとも里山＜像＞なのか
4. 原発事故後「里山」へのまなざしの変化
5. 人口減少時代と「アンダーユース」を背景にした諸研究
6. おわりに

2012年以降の「里山」研究の動向について

張 曼青

1. はじめに

いまさら、なぜ「里山」なのか。

「里山」という言葉が今の意味で使われてから、50年以上も経ってきた。本研究で取り上げる諸先行研究の多くも文章の冒頭で上記のように「今の里山」について問いかけている。つまり、「里山」は誰が見ても不変で客観的な存在というよりも、時代によってその意味が変わるのである。さらに、里山をめぐる言説は、農村の過剰開発や都市化といった、現実の社会課題に対応して使われる一方で、政府文書やメディア報道により広がり、里山の問題はこうして社会的に構築されている。つまり、里山の意味も、それに向けられたまなざしも、時代の変化とともに変容するのである。だからこそ、時代ごとに「里山」の動向を見る必要がある。また、新型コロナウイルスの感染拡大により、リモートワークの普及が進み、都市部の住民が地方に散在する機会が増えている。人々が改めて里山里海に触れ合える機会につながるだろう。したがって「いまさら」よりも、「いまこそ」、「里山」を見直すべき時なのである。

このため、最近の「里山」の動向を整理していきたい。主に2012年以降の「里山」に関するさまざまな研究や議論に焦点を当てている。この焦点を当てる理由は、次の3つがある。まず、2012年以前の研究動向は、第2章で挙げている深町ら(1998)、寺田(2012)、松村ら(2010)において十分に整理されている一方で、2012年の「里山」に関するレビュー論文は見当たらなかった。また、2011年東日本大震災で、多くの人々が「里」を失い、森林が大規模な除染の対象から外れてきた。被災地の住民がふるさとに帰還しても里山を利用することはできない状況が続いている。したがって、このような特殊な状況下で「里山」はどう議論されているのかについても考察する必要があると筆者は考えている。

これらの考慮を踏まえ、本研究は第2章でまず「里山」の概念を改めて把握した上で、既存のレビュー論文の内容を概説する。既存レビューにおいて、里山への主観混ざりの「過剰賛美」が共通して存在する点が松村らが指摘していることから、引き続き第3章で、この「里山」を賞賛することへの反省的なまなざしを重点的にまとめていく。さらに震災とさらなる加速する人口減少という重要な社会情勢を背景に、「里山」の研究がいかに展開されるのかを第4、第5章で整理する。

2. 「里山」概念の変化と既存のレビュー論文

2.1 「里山」とはなにか

先に申し上げると、「里山」その言葉が時代に応じて変化し、そして多義的に使用されてきたほか、人によりその意味も異なってくる。例えば、四手井(1972)による里山は、「奥山に対して里に近い山」であり、より具体的には、林学でいう農用林である。

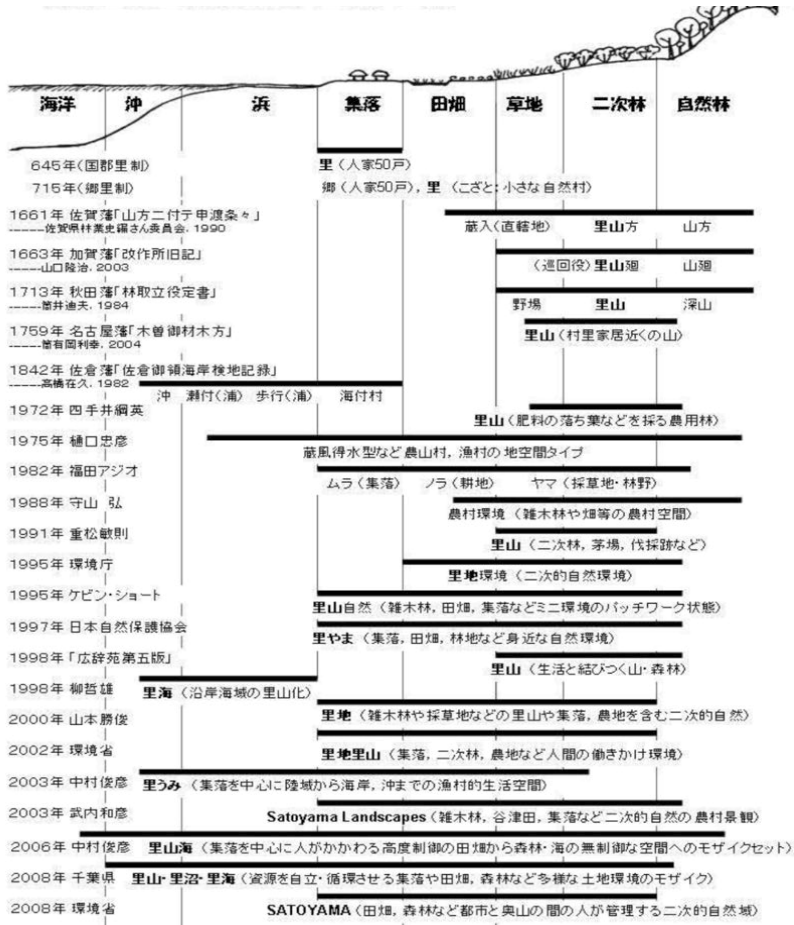


図1. 人の生活空間の認識と里山、里海 (中村ら、2010)

この場合では主に山や林を指しているが、藤田(2018)の指摘によれば、最近では集落に近い森林のうち、針葉樹の植林地を除いたエリアに限定して使用されることが多く、いわば広葉樹の雑木林が里山の典型的なイメージである。ボランティアによる保全活動の対象も主に雑木林であり、針葉樹林の枝打ちや間伐を行う「森林ボランティア」と呼ばれるものとは区別される。

また山や林のみならず、周囲のランドスケープを含んだ総合的環境を指すように、「里

山」がさす範囲が拡大してきた（図1）。つまり、里山は周囲のランドスケープから独立する存在ではなく、農家の生活において、萱場や水田、ため池などと一体的に使われてきた二次的自然環境であるという理解である。

2.2 既存のレビュー論文について

これまでの「里山」に関するレビュー論文も多数存在し、本章においては、主に「ランドスケープ」研究誌で発表されたレビュー論文及び人文社会系のレビュー論文を中心に整理していく。

特に先駆として挙げられるのは、深町ら（1998）による、人と自然の接点を扱う計画論から里山の研究を時代ごとに整理した文章である。表1にも示すように、1980年代以降「民俗学」との接点について、深町らは整理しており、特に、伝統的な農村の空間構造の特質や環境維持システムの再評価（例えば、景観構成に大きく役割を果たす「ヤマ」と里山を取り巻く風土）があげられる。つまり、1960年代に都市の視点に立つ研究とは対照的に、こういった農村の視点に立つ研究も多く現れたのである。視点の多様化のみならず、さらに、研究対象も雑木林に水田やため池なども加えた環境複合系としての「里山」へと拡大していったのである。

表1 1960年代～1990年代における「里山」への視点の変化（深町1998より筆者作成）

年代	視点
1960年代	土地利用・緑地計画論は、開発する側である都市の論理・視点に立つものが主流であり、その中農村全体の計画の中で里山を考える
1970年代	森林レクリエーションなどの公益機能を高めるために植生管理の必要性が認識され、機能評価手法の開発が考えられていた
1980年代	里山開発と都市化に伴う二次林の植生変化、薪炭生産などの人為的影響による二次林の更新過程など里山の生物相に関する理解が深まり、新たな植生管理手法が提示された
1980年代以降 （～90年代）	文化的里山景観の形成過程（山の名所化など）、人と山との精神的関わりの変化、生産領域の「ヤマ」の農村空間構造を構成する役割、農村風土の構造や日本文化としての森林に主眼を置く研究

深町らに続き、寺田（2012）は2008年以降～2012までの三年間におけるランドスケープ研究誌で発表された「里山保全・活用」に関する論文を中心に整理している。主に①生物多様性の保全、②市民参加、③歴史・文化（動態保全、継承された伝統行事や共同の資源管理の仕組みといった不変的な部分）、④現代的活用（バイオマス利用による低炭素社会への貢献、レクリエーションや森林セラピー、芸術との関係性、企業の里山保全活動）⑤「制度・施策」という5つのカテゴリーに大別している。寺田によれば、②市民参加と③歴史・文化に論文が集中している傾向がみられる一方、④現代的な活用の部分について2008～2012年に新たなテーマの広がりが見られたと述べている。

また、人文社会系のレビュー論文について、環境社会学とその隣接分野（保全生態学、人類生態学、環境民俗学など）から生物多様性・里山に関わる研究動向をまとめた、松村ら（2010）の研究が代表として挙げられる¹⁾。松村ら（2010）ではまず、原生的な自然よりも里山林のような二次的自然において多くの生物種が育まれる（守山 1988）ということから、里山の危機は、環境省が生物多様性の危機を3つに整理する際の「第2の危機」と呼ばれ、自然に対する人間の働きかけの縮小撤退（アンダーユース）による影響が議論されている。そこで生まれてくるのは市民ボランティア²⁾と企業CSRや環境ビジネスという。また、松村ら（2010）は、里山ブームに対して批判する環境史の研究も取り上げている。つまり、里山景観の変化を調査・解明する研究からは、里山林でも過去にははげ山や草地といったところが多かったにもかかわらず、望ましい「里山」の一側面のみ持ち上げられたことへの批判がある。

ただし、松村ら自身も「過剰な里山賛美に対する違和感には共鳴できる」と述べているが、「里山」は生物多様性が理想的な形で守られるモデルとして提示されている（すなわち、規範的な理念）ため、ただ歴史的事実に反証することの有効性に疑問を掲げて、「批判」への「反批判」を行った。松村ら（2010）はさらに、「里山が理想化されたイメージに過ぎない」をもし批判するのであれば、＜里山＞を歴史的・社会的文脈の中で捉え、イメージの動きやそこに働くポリティクスに迫る必要があるのではないかという有力な見解を述べている。現実の社会で＜里山＞が社会実験の場として大きな意味を持つと主張し、そして、注意すべきことは、里山イメージの単純化による弊害であると松村ら（2010）は強調している。

本研究は2012年以降の論文を中心に整理を行っているが、里山の理想化されたイメージについて2012年後にも見当たる。その詳細およびそれぞれの異同について次章で探っていく。

3. 里山ブームへの批判：＜里山＞像なのかそれとも里山＜像＞なのか

前述したように、＜里山＞のイメージは社会的に構築されている部分がある。この理想化されるイメージについて、生田（2015）は「＜里山＞像なのか、それとも里山＜像＞なのか」という問いを通じて詳細に分析している。＜里山＞像は、里山の歴史性を含め、里山の実態に立ち入った検証から抽出された特質に基づき、構築されるものであるのに対し、里山＜像＞は、集合的な＜私＞の感情が作用して、人間と自然との関係をめぐる願望や理念が投影されたものである。生田もまた二者を峻別することが必要だと強調している。特に、後者について、「理念として語りやすい要素を選別し、それをモデルとしての里山に投影させ、望ましい里山の＜像＞を仮想する」という言説の戦略」がとられている。またその＜像＞がある程度定着すると、また＜像＞に適合すると判断される言説を繰り返すという言説の再生産がおのずとできている。生田（2015）はこうした「里山」

に対する一面的な理解、そして「里山」以外の場所で蓄積された人間と自然との多様な関係性を排除してしまうことの危険性も指摘している。

同様に、里山保全論に学者のノスタルジーといった「主観」が混在していることについて藤田（2018）は指摘している。さらに、藤田は、「里山」に潜んでいる「エコロジカル・ナショナリズム」の論理的展開を整理し、観光とメディアという装置により、「自分のふるさと」を距離を置いて見るようになり、またそれを「外在化され、抽象化され」た「日本のふるさと」イメージとして捉えなおすという論理で、「ふるさと」とその風景は個別具体的なものからナショナリズムに転化すると論じている。また、里山をめぐるエコロジカル・ナショナリズムには、科学知識に裏打ちされたことについて、科学知識が有する権力性の問題、そして科学が政治性を隠蔽する道具としての作用を指摘している。その一方、地域が自ら権力への「抵抗」する試みもなされていると述べられている。

表2 里山ブームへの批判的視点の比較（松村ら 2010、生田 2015、藤田 2018 より筆者作成）

文献	キーワード	里山ブームの危険性に関する論述	それぞれの筆者の主張の重点
松村ら（2010）	「過剰な賛美」	里山イメージの単純化によって生じる弊害	「歴史実証的批判」よりも、里山イメージ形成について「リアリティからの反批判」の重要性を提起、「生態学的ポリティクス」
生田（2015）	「集合的なく私」の感情、主観	「里山」への一面的理解、ほかの多様な営みを無視・排除	私たちが位置する所与の場所の意味を内省的に洞察
藤田（2018）	「日本のふるさと」	エコロジカル・ナショナリズム、政治性	地域の抵抗

そもそも、里山を「環境保全」の角度から語るのは、1990年代以降のことである。「里山」概念史を分析している岡田（2017）によれば、1990年代に自然保護運動の中で普及してきた「里山概念」以降の変遷に注目が集まる反面、それ以前の状況は断片的にしかな言及されていなかった。戦後直後に政策上の用語として「里山」が登場すると同時に、荒廃した改善すべき空間とされていたが、その後も何回か転換を経てきた。そして現在では「里山」は自然保護分野で多く使用されるが、林業政策から次第に離れつつあることも指摘されている。

4. 原発事故後「里山」へのまなざしの変化

2011年の東日本大震災発生後、里山をめぐる論考の変化が特徴的である。まず、一部の人は震災を契機に、食品安全への意識覚醒及び自分のライフスタイルへの反省が始まり、「里山」への関心が強まる傾向がみられる。農村移住を支援するNPOに相談し、移

住に関する情報を収集する風潮もあった（南 2022）。その風潮は次第に収まってきたが、その名残として、若者及び家族連れの人たちは「田園回帰」、つまり農村移住と食に対する関心がやはり続いている。また、松村（2019）によれば、このような「自分たちの暮らしを自律的に立て、「イニシアティブを握れる範囲で自分たちの住む地域を良くしようとする」若者有志は、地方のみならず、都市近郊でも活動している事例（多摩三浦丘陵群の事例）を紹介している。

また、上記したような個人のライフスタイル次元を超えて、巨大システムの安全性や社会のあり方への反省や思考も行われた。その中で、従来の貨幣を介した交換、巨大システム依存、分業で成り立った社会や経済の在り方に対して疑問を掲げた「里山資本主義」（藻谷 2013、藻谷 2020）はその典型的な例である。「里山資本主義」は従来の「マネー資本主義」へのアンチテーゼとして提起され、里山に眠る金銭換算では無価値な資源、例えば水や燃料や食糧などを見直して、地域の自立性及び韌性のある経済システムを目指している。

原発事故が、豊かな自然と生業の基礎である「里山」の暮らしに大きな影響をもたらす。森林除染が遅れており、山菜やキノコといったマイナーサブシステムは地域の人々にとって重要な存在であったにもかかわらず、故郷に帰還したとしても、元の生活に戻れない。つまり、除本（2021）が指摘するように、福島原発事故による「生活の剥奪」や「ふるさとの喪失」は、可視化しにくい被害がある。このような福島と里山をセットで議論する研究が事故発生後多く見られる。金子（2018）は震災後放射線物質による森林の汚染の現状と里山の被害について述べたうえで、福島の経験をきっかけに、新たな里山利用法を考え直さなければならぬと強調した³⁾。その理由として、例えば、森林から落ち葉を採取して堆肥（腐葉土肥料）として農地に投入するという里山の伝統的な利用法の一つはあるが、従来の里山で落ち葉を収奪された土壌が貧栄養で、土壌侵食が深刻であった。そして機械で頻繁に耕す管理を行う現在では、堆肥を投入してもすぐに分解され、土壌の有機物の増加につながらなくなったというわけである。最後に金子は、もともと中山間地域の人口減少と担い手不足問題が発生していたため、事故がなくても、里山の農業や暮らしにおける位置づけを見直すべきであると述べている。この点は松村（2019）と共通する部分が見られる。松村は里山保全運動が近年直面した「閉鎖状況」について以下のように述べた：

里山保全運動の意味を読み解き、この流れを継承するには、どのような実践が必要なのだろうか。この問いへの自分なりの答えは、過去からの延長線上にではなく、2011年以降の若者有志の動きとの共振から生まれた。（松村 2019:26）

すなわち、こうした「福島」と里山をセットで考察する研究では、議論は福島にとどまらず、むしろ「福島」を重要な転換点と位置付けて、「里山」のあり方について展望しているのである。

5. 人口減少時代と「アンダーユース」を背景にした諸研究

上記した福島原発事故のほか、「里山」について、人口減少と「アンダーユース（過少利用）」という背景のもとで議論が展開されてきた⁴⁾。ここでいうアンダーユースというのは、里山里海域の社会では、人口の減少や耕作放棄地の増加、さらには生物多様性と生態系の劣化という、人間活動の縮小により生態系が荒れていく危機（「第2の危機」）である⁵⁾。

例えば、深町（2014）の琵琶湖西岸の伝統的な里山の事例では、地域住民が自然・社会環境に応じた空間を使い分け、独自の規則や組織を機能させたことについて述べられた一方、伝統的な仕組みの変化や形骸化への懸念も示された。こうして、地域の伝統的な仕組みの里山保全に対する意味を強調する一方、大きな社会変化も意識しつつ議論している。

人口減少問題が深刻化するに伴い、農家が担い手だった里山の保全には、1990年代以降次第にボランティアといった外部の人が参入する必要性ができてきた。また、里山も従来の食料や水などの供給サービス以外に、人々の里山の利用の仕方もしくはかかわり方も多様化してきた。レクリエーションや教育などの文化サービスも持っている（付録1を参照）。そこで、こういった人々がいかに里山と関わってきたのかという「里山経験」に問題関心も集まっている。大森（2022）は里山研究の研究視座の変遷⁶⁾を整理しつつ、里山と人々との関係形成のプロセスを提示した。すなわち、里山と人々の間には、里山は人々に多様な便益を提供し、人々はその便益を享受し続けられるように里山保全行動を行うという相互作用の関係がある。図2で示しているように、【人々の里山保全活動を促進することを念頭におき、里山資源とその経験評価を行う研究群（①②）】と【里山経験の価値評価から里山保全活動の行動意図に至るまで因果関係を解明しようとする研究群（③④）】に分けられている。

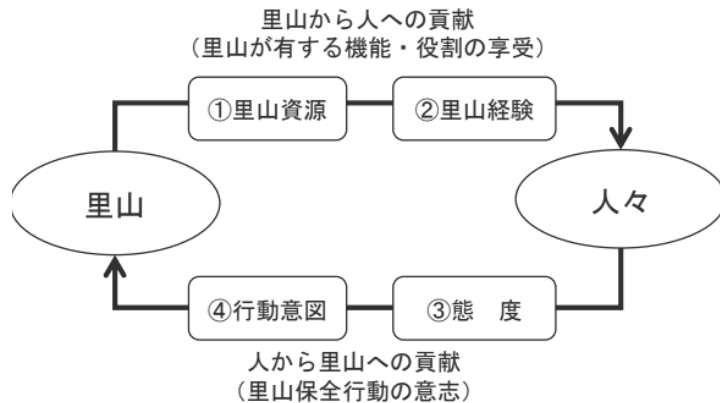


図2. 里山と人々との関係形成（大森 2022）

また、アンダーユースの影響による生物多様性と生態系の劣化の問題のみならず、奥(2013)は社会的な構造に関する劣化も指摘している。農村地域の人口減少は直接的な労働力な減少につながり、さらに「地域が保つべきさまざまな仕組み、記憶の喪失という形で里山林との関係性を損耗させている」と奥は提起している。調整サービスのような森林が存在することで発揮されるサービスもあれば、人・社会側に適切な享受能力で初めて発揮されるサービスが存在する。後者は供給サービスと文化的サービスで、表3で示したような「享受能力」との相互作用が必要である。

表3 奥(2013)が提起した「享受能力」の分類と生態系サービスとの対応(奥2013により筆者加筆・作成)

分類の依拠	能力	具体例	対応する生態系サービス
生業との関係性による分類	生業に直接関係する能力	有用材の樹種を判断する能力、伐採や搬出の技術、更新や植栽など生業の持続性に関する知識	供給サービス
	マイナーサブシステムの能力	山菜やキノコ採取、一部の狩猟や漁法の技術	供給サービス、文化的サービス
	生活基盤の維持に関わる能力	災害に対する安全性や危険性、水や交通の利便性など、その土地が有している調整サービス、災害防止機能を読み解く能力	調整サービス
	生業とは直接関係しない精神文化的能力	風景の観賞や宗教儀礼等への意味づけ	文化的サービス
時間軸により享受能力の社会への定着による分類	伝統的に地域社会に埋め込まれてきた能力	萌芽更新施業、草地管理、焼畑等の伝統的生態知	
	近年外部からの指導・普及・発見による能力	針葉樹人工造林、製炭などの景観としての評価能力	
	将来新たに定着する可能性のある能力	高性能機械類の利用	

さらに、課題解決に向けて、観光再訪問者、移住や関係人口の「里山経験」に注目が集まる中、訪問前の発信と訪問後の体験・語り・記憶とのズレについて、テキストマイニング/GTAにより構造化・可視化しようと試みる研究が進められてきた。

例えば泉澤ら(2019)は、再訪問者を獲得するために有益な情報発信のあり方の検討を目的に、前観光経験と有意味な経験についてガイドブックと旅行記をテキストマイニングで分析した。有意味な経験では、観光者の能動性が関与できる経験として「現代アート」の表出が確認できた。ほかにも、高瀬(2018)は、若者を対象とした緑地保全活動の実習プログラムの内容と得られる経験の関係性についてKHcoderを使ったテキストマイニングを通して分析した。そして清水ら(2017)は、都市近郊型里山(長岡京市西山

丘陵) に対して地域住民の里山経験と里山の価値評価との関係を、市民アンケートを通して調査し、その結果、身体的経験(ハイキングや散歩)、能動的経験(森林保全ボランティア)、学習的経験(自然観察会等の現地学習、文化・歴史の学習)がある人の方が、経験がない人よりも、景観、レクリエーションの場、生態系の維持などに対して高い価値評価をすることを検証している。こういった研究は、人々の里山とのかかわり経験を明らかにすることにより、長期的な視点から見れば里山保全の担い手育成につながる可能性について示唆を与えている。

ただし、筆者は2点について疑問を抱いている。まず、これらの研究では「観光経験」や「再訪問・観光リピーター」の経験に重心が置かれているが、「関係人口」に至るまでどういったプロセスを経てきたのかは不明瞭である。言い換えれば、「関係人口」という言葉自体の曖昧さにより、関係人口が具体的に「里山保全」にいかに関に役に立つのかは、かかわり方により多様だし、明確化することが難しいのではないかと考えている。また、泉澤ら(2019)のような「前観光経験」と「有意味な観光経験」のズレを比較分析する研究が示唆深いと同時に、同一人物の観光前と観光後を対応させて分析する必要がある。

6. おわりに

本研究では、「里山」をめぐる諸研究の動向について、2012年以降の論文を中心に整理してみた。全体を通して、以下のようなことが見えてきた。

まずは、注目すべきは、「里山」へのまなごしの変化である。第3章と第4章で整理したように、「里山」の過剰な賞賛に対する批判が行われているほか、福島原発事故を意識して新たな「里山」の在り方を議論する研究も2012年以降に見られている。

また、「里山」に関するテーマの広がりや傾向に加えて、農山村の人口減少の傾向が止められないなか、「関係人口」への期待が寄せられている。また、関係人口の里山へのかかわり方も多様化している。一方で、かかわり方の多様化が、それぞれの経験の違いを生むことから、「里山」の保全への効果を検証するのは難しい側面もあると考えている。さらに、地域の伝統的な仕組みやローカル知の有効性が検証・強調されるなか、関係人口が、いかに地域の伝統的な仕組みと「すりあわせ」するのか、もしくは関係人口に該当する主体が「ローカリティ」をいかに内面化するのか、さらには、地域の社会構造との交渉・適応においていかに自分の立ち位置を意味づけしているのかについてさらなる検討が必要となるだろう。これは、松村(2007)で指摘した目的のズレによるボランティアの「失敗」と共通するところもある。

次に、「里山」という概念が定着するにつれて、従来農村の生活・生産に埋め込まれた「里山」が、距離を置いて見られるようになりつつあると筆者は感じている。丸山(2009)が論じたように、里山が「文化的景観」として議論され、里山的自然を「文化としての自然」として位置付けることの重要性が示唆される一方、里山の「日常性」がしばしば見落と

されがちではないか。多様なかわり方について、個別の経験に焦点を当てて、質的調査が必要と同時に、「里山」のためになにかをするというより、日常生活の中に組み込むかことを改めて考えていく必要があるのではいかと考えている。

なお、以上で見てきた研究は主に日本国内の研究である。「里山 (Satoyama)」は日本で生まれた概念でありながら、日本国外でも引用されることがある。例えば中国大陸・台湾でも「里山」に関する研究が近年増加している。これらの研究を整理し、比較検討することも今後の課題だろう。

注

- 1) 松村ら (2010) では、生物多様性と里山に対してレビューを行っている。生物多様性について、「フィールドワークからの批判」についても論じている。具体的には、1. 生物多様性の喪失によりローカルの現場がどう変わるのか、その生活世界における意味を描きだし、2. 生物多様性を保全することにより、人々の暮らしにどう影響するのかを明らかにする。後者について、保全政策が住民が土地から排除 (原田 2001) されることから、保護区のあり方への批判も行われているのである。「里山」と直接関係しないため、その詳細を脚注で示すことにした。
- 2) この「里山ボランティア」の課題について、松村は別稿 (松村 2007) で詳述している。ここで贅言しない。
- 3) 木質チップを林床に敷設して微生物を繁茂させることで除染をする方法をその一例として紹介されている (金子 2018)
- 4) Google scholar に「里山」、「アンダーユース」をキーワードで入力して検索した 75 件の文献うち、2012 年以降は 61 件である。
- 5) 燃料革命や生活習慣の変化により里山資源の利用価値がなくなり、また地主の開発期待もあり、里山は放置されるようになった。その結果、雑木林はタケ、ササ類や常緑樹が繁茂するなどヤブ化が進行している。放置された水田も陸地化とヤブ化が進行している。外来種の侵入や温暖化が深刻さに拍車をかけている (田中 2010)。なお、第 1 の危機は、開発による自然の消失やオーバーユースによる「失われていく危機」である。
- 6) 大森は里山研究をレビューし、里山の研究視座を年代別に 5 つに分けた。① 1970 年代: 燃料革命 (薪→石油)・木材貿易自由化による里山資源の放置、都市化による市街地の無秩序拡大を背景に、都市周辺の緑地確保、そして森林保全の観点から都市近郊の里山が注目、② 1980 年代: 乱開発から里山を守る市民の里山保全運動、③ 1990 年代: 生態系と文化の複合環境としての里山の理解、④ 2000 年代: 人と生態系と相互作用する里山の理解、⑤ 2010 年代: 里山の国際的な枠組みへの拡張。

付録

注 1 生態系サービス (環境省 2012)

生態系サービスの分類	
供給サービス	食料 (例: 魚、肉、果物、きのこ)
	水 (例: 飲用、灌漑用、冷却用)
	原材料 (例: 繊維、木材、燃料、飼料、肥料、鉱物)
	遺伝資源 (例: 農作物の品種改良、医薬品開発)
	薬用資源 (例: 薬、化粧品、染料、実験動物)
	観賞資源 (例: 工芸品、観賞植物、ペット動物、ファッション)
調整サービス	大気質調整 (例: ヒートアイランド緩和、微粒塵・化学物質などの捕捉)
	気候調整 (例: 炭素固定、植生が降雨量に与える影響)
	局所災害の緩和 (例: 暴風と洪水による被害の緩和)
	水量調整 (例: 排水、灌漑、干ばつ防止)
	水質浄化
	土壌浸食の抑制
	地力 (土壌肥沃度) の維持 (土壌形成を含む)
	花粉媒介
生物学的コントロール (例: 種子の散布、病害虫のコントロール)	
生息・生育地サービス	生息・生育環境の提供
	遺伝的多様性の維持 (特に遺伝子プールの保護)
文化的サービス	自然景観の保全
	レクリエーションや観光の場と機会
	文化、芸術、デザインへのインスピレーション
	神秘的体験
	科学や教育に関する知識

引用文献

日本語

- 大森寛文 (2022), 「里山と人々との関係形成プロセスの基礎的考察: 里山経験を通じた地域活性化への期待」『明星大学経営学研究紀要』第 18 巻, 45-64 頁
- 金子信博 (2018), 「第 4 章 いま里山はどうなっているのか」菅野正寿・原田直樹 (編)『農と土のある暮らしを次世代へ: 原発事故からの農村の再生』コモンズ
- 丸山徳次・宮浦富保 (2009), 『里山のまなざし「森のある大学」から』昭和堂
- 丸山徳次・宮浦富保 (2007), 『里山学のすすめ: 「文化としての自然」再生にむけて』昭和堂
- 中島清隆 (2020), 「東日本大震災の復興から新生に向けた持続可能な地域社会の構成要素と形成要件 (2)—里山資本主義論・田園回帰 1 % 戦略論と内発的発展論の関係性の観点から—」『岩手大学人文社会科学部紀要』, 29-47 頁

- 中村俊彦, 本田裕子 (2010), 「里山, 里海の語法と概念の変遷」『千葉県生物多様性センター研究報告』第2巻, 13-20頁
- 田中章 (2010), 「2010 里山のオーバーユースとアンダーユース問題を解決する“SATOYAMA バンキング” —生物多様性バンキング・戦略的環境アセスメントと里山保全の融合」『環境自治体白書』, 47-51頁
- 泉澤圭亮, 中鉢令兒 (2019), 「テキストマイニングの手法の活用による観光者の経験に着目した観光地の理解構造の変化に関する研究—再訪観光者を獲得するための効果的な情報発信方法のあり方の確立を目指して—」『観光研究』第31巻, 45-56頁
- 牛尾洋也, 鈴木龍也 (編) (2012), 『里山のガバナンス: 里山学のひらく地平』晃洋書房
- 深町加津枝, 佐久間大輔 (1998), 「里山研究の系譜 人と自然の接点を扱う計画論を模索する中で」『ランドスケープ研究』第61巻, 276-280頁
- 深町加津枝 (2014), 「里山の自然資源の利活用を巡る伝統的な仕組みの意義」『農村計画学会誌』第33巻1号, 13-16頁
- 藤田渡 (2017), 「里山のポリティクス: エコロジカル・ナショナリズム研究序説」『甲南女子大学研究紀要』第54巻, 29-45頁
- 藻谷浩介・NHK 広島取材班 (2014), 『里山資本主義: 日本経済は「安心の原理」で動く』角川新書
- 藻谷浩介 Japan Times Satoyama 推進コンソーシアム (編集) (2020), 『進化する里山資本主義』ジャパンタイムズ出版
- 松村正治, 香坂玲 (2010), 「生物多様性・里山の研究動向から考える人間-自然系の環境社会学」『環境社会学研究』第16巻, 179-196頁
- 鎌田磨人 (2014), 『里山の今とこれから, エコロジー講座7』日本生態学会
- 寺田徹 (2012), 「里山の保全と活用」『ランドスケープ研究』, 第76, 22-27頁
- 松村正治 (2019), 「低成長時代に都市近郊の里山で仕事をつくる」『ランドスケープ研究』第83巻, 24-27頁
- 生田省悟 (2015), 「なぜ里山なのか—近代の自然言説から」『金沢法学』第58巻, 1-21頁
- 除本理史 (2021), 「第3章 「ふるさとの喪失」への償いと地域再生を求めて」藤川賢・石井秀樹 (編) 『ふくしま振興—農と暮らしの復権』東信堂
- 中国語**
- 南裕子 (2022), 日本の“田园回归”现象与农村社区振兴, 张季风 李清如 叶琳 (编) 《日本经济蓝皮书: 日本经济与中日经贸关系研究报告》社会科学文献出版社

Trends in “Satoyama” Research since 2012

Manqing ZHANG

In this study, we first revisit the concept of “Satoyama” and provide an overview of existing review articles. We then organize the trends in research related to “Satoyama,” focusing on papers published since 2012. Throughout the study, several key observations have emerged.

First, it is essential to note the shifting perspectives on “Satoyama.” Critiques of the excessive praise of “Satoyama” have been increasing. Moreover, studies exploring new perspectives on “Satoyama” with a heightened awareness of the Fukushima nuclear disaster have been increasing since 2012.

Additionally, we observe a broadening of themes related to “Satoyama.” Within the context of an ongoing trend of depopulation in rural areas, the expectation placed on “stakeholder populations” in contributing to the preservation of “Satoyama” is growing. The involvement of these stakeholder populations is becoming increasingly diverse. However, the diversity in involvement presents a challenge when assessing the effectiveness of conservation efforts, as the unique experiences of each stakeholder may differ significantly. Furthermore, as there is a renewed focus on the effectiveness of traditional local systems and the validity of local knowledge, it is imperative to investigate how stakeholder populations align with and adapt to these traditional structures. This investigation should also explore how the stakeholders internalize the concept of “locality” and determine their position in negotiations and adaptations within the local social structure. This aspect bears a resemblance to what Matsumura (2007) highlighted as a misalignment of objectives, often leading to “failures” in volunteer efforts.

Next, as the concept of “Satoyama” becomes more established, there is a growing sense that “Satoyama,” which has traditionally been intertwined with rural life and production, is now being observed from a more detached perspective. As Maruyama (2009) argued, “Satoyama” is being discussed as a “cultural landscape,” emphasizing the importance of positioning the natural aspects of “Satoyama” as “nature within culture.” However, there is a tendency to overlook the everyday aspects of “Satoyama.”(313words)

Key words: satoyama; depopulation; Fukushima